



英語科の松山先生は幸運な人です。「知っている」だけのことを本当に「わかる」体験ができたのです。授業でも、単に暗記する対象としての言葉と、社会で使われ、自分に関連する事柄に関する言葉では覚えやすさは全く違います。自分のものにする、ということは、言うは易し、なかなか本当のものにするには難しいものです。一般に、映画を見てから本を読むか、読んでから見るか、どちらがより楽しめるか、という議論がされていますが、皆さんはどうでしょうか。大勢の人が映画を見てから本を読んだほうが頭に入るし、さらに理解が進む、というのではないのでしょうか。映画ならそれぞれ登場人物が出てきて、それぞれのセリフを喋り、しかも2時間前後でまとめられているため、重要でない監督が判断した箇所は省かれていたりします。本を読む前に事前情報として登場人物のイメージができていて、話の大筋がつかめているので、ちょっと分からない文章が出てきても大体の感覚で読めるし、セリフも誰が発したものがよく分かっているので、大した労力もかけずに理解することができます。「わかる」につながるたくさんの手段を身に付けてほしいです。

「知っている」から「わかる」へ

英語科 松山貴裕

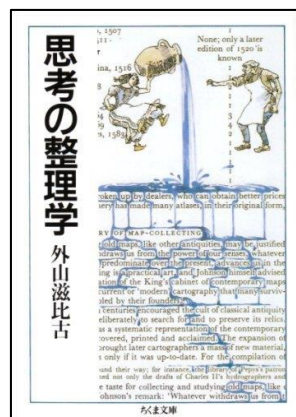
「本を読むと、世界が広がる」とよく言われます。この言葉は正しいのでしょうか。私は半分正解で、半分不正解だと思っています。なぜなら、本の内容と読者の経験との関係によって、読書の効果はすぐに現れることもあればそうでないこともあるからです。

1年生は先日、沖縄へ修学旅行に行ってきました。そこで、「知っている」と「わかる」が驚くほど違うということを経験したはず。皆さんは修学旅行の事前学習として沖縄戦を中心とした多くの問題について調べ、発表活動を行いました。つまり、数多くの文献を読み、沖縄の問題について「知っている」状態で沖縄に行きました。しかしながら、実際に沖縄に行き史跡に触れ、現地の方々の考えや思い、複雑な状況を理解することによって、事前学習の内容を深く理解することができ、ただ本を読むだけでは感じ取ることができなかった部分まで「わかる」ことができたのではないのでしょうか。ガマのボランティアの方の話の聞いているみなさんの真剣な表情を、私は忘れることができません。

本を読むと、膨大な情報が読者の中に入ってきます。もしかするとその情報はただ数が多いだけで、心に響くものは少ないかもしれません。『本を読んでも世界なんてちっとも広がらないしつまらない』と思う原因はここにあるのかもしれませんが。しかし、皆さんは沖縄での経験のような、『ああなるほど、そういうことだったのか』と「わかる」経験をきっとしたことがあると思います。

「わかる」の体験を身につけて『思考の整理学』松山貴裕

「本を読むと、世界が広がる」のではなく、「本を読むと、世界が広がる可能性がある」のです。「知っている」から「わかる」へ変わる瞬間、胸がしめつけられるような、小躍りしたいような複雑な気分になります。また、考えがまとまらずもやもやしていた時1冊の本と出会い、ハッとした瞬間もそうです。「わかる」時の喜びのために私は読書をするようにしています。



ここで、「知っている」から「わかる」への移り変わりを強烈に感じることができた2冊を紹介します。1冊目は、外山滋比古の『思考の整理学』です。タイトルからわかるように、私たちが何かを考えたときのヒントを与えてくれる本です。たとえば、一晩中考え込んでも結論がでなかったにもかかわらず、3日後突然すばらしい

考えを思いついたことはないのでしょうか。カレーやお酒は、完成してすぐ食べるより、何日か経過してからの方がよりおいしいと言われています。考えも同じで、事実を頭の中に入れてすぐ良い考えを思いつくものではありません。『思考の整理学』では、考えをカレーやお酒と関連づけて考えたように、思考に関することがらを身近なものを例にとって考えていきます。タイトルからは読むのが難しそうな印象を受けますが、多くの例が使われ非常に読みやすい本です。きっと、「ああ、そういうことか」と納得することができる内容が書かれていると思います。

2冊目は、養老孟司の『バカの壁』です。インパクトのあるタイトルが目につき、気がつけば手に取って読んでいました。勉強ができる人とそうでない人の違いを述べる内容かと想像していましたが、実際はそうではなく、共同体とは何か、個性的とはどういうことか、といったことについて書かれています。



「個性を發揮して生きなさい」とよく言われます。しかしながら、個性を發揮する舞台はあくまで常識的な行動を求められる現代の共同体です。こう考えると、個性的に生きるとはどういうことを意味するのかよくわからなくなります。個性を發揮した行動が常識外れだった場合、共同体に受け入れられることはきっとないでしょう。つまり、今求められている個性的な生き方は、あくまで常識の範囲内ということになります。こういった問題提起を『バカの壁』は行ってくれます。本を読んだだけでは答えは出ないかもしれませんが、しかし、考えるきっかけになる本です。

外山滋比古の『思考の整理学』と養老孟司の『バカの壁』を紹介しました。この本を読んだからといって、必ずしも皆さんの心に響くとは限りません。皆さんの経験と本の内容とが結びついていないこともあるからです。ですが、「知っている」と「わかる」瞬間が皆さんにも訪れることを願っています。